館長だより

山形県産業科学館

令和６年４月２８日(日)

発行 館長　加 藤 智 一

合唱との出会い③

退職にともなって、いらなくなった本とか資料とかを整理し始めてはいるのだけれど、なかなか前に進まない。それもそのはず、一度手に取ると、様々なことが思い出されて、ついつい見入ってしまい、なおさら前に進まない。そんなときに出会ってしまったのが、１０年前、息子が通っていた大学の後援会報（会報といっても 308 ページもある立派なやつ）の寄稿文。読み返したら、結構真面目に良い事書いているではないか。そこで今回はこの寄稿文をそのまま紹介させてください。今日はその第三回にして最終回。

農大学法 137　第 57 巻　第 2 号　平成 26 年 1 月

（東京農業大学教育後援会）p120～p122 より

第３回　「人生最後の一曲」

１０数年前になるが、米沢男声合唱団に在籍していたころ、定期演奏会の曲目にアカペラの合唱曲/多田武彦「男声合唱曲集」を取り上げたことがあった。その中の一曲が、「雨」。

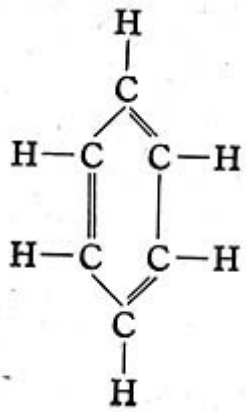
雨のおとが　きこえる
雨がふっていたのだ。
あのおとのように
　そっと世のために　はたらいていよう。
雨があがるように　しずかに死んでゆこう。

【多田武彦作曲　八木重吉作詩】

毎日何かに追い立てられるように働いて、わずかな達成感とわずかな挫折を繰り返しながら、誰から褒められるでもなく、ただただまじめに働いて一日が終わっていく。これで自分の人生本当に良いのか。と思っていた時に出会った一曲である。衝撃的であった。涙がでた。この短い詩に、癒された。焦らなくても良いよ、今のままで十分じゃないか。と励ましてくれているように思えた。自分の仕事に誇りを持って、正直に生きる事の尊さを感じた。そして、だからこそ静かに死を受け入れることができるのだと教えられた。以来この曲は私にとって特別な曲となった。いつか私も死を迎える時が来る。その時は、合唱の仲間達にお願いしたい。「雨」を歌って送って欲しい。私は必ず「雨」を降らせて待っている。その時は、誰がソロパートをやってくれるのだろうか。

館長の独り言

ケクレの夢　C_6H_6　ベンゼン環構造の発想



「ある晩のこと、ケクレは椅子に坐って自分の教科書を書いていた。だがその仕事は進まなかった。　ケクレの考えは別のところにあった。ケクレは椅子を暖炉の火のほうにまわして、ウトウトまどろんだ。すると目の前に原子がはねまわっていた。こんどは小さい原子はつつましくうしろのほうにひかえていた。ケクレの心の目は、この種の光景をくりかえし見ていたため、こんどはいろいろな形をしたもっと大きな構造を見分けることができるようになっていた。たくさんの長い列が、互いにぴったりよりそって、ねじれたり巻きついたりしながらヘビのような運動をしていた。だがみよ！これは何だろう？一ぴきのヘビが自分の尾をくわえ、輪になって、私の目の前でふざけたようにぐるぐるまわった。まるで閃光に打たれたようにケクレは目をさました。そして徹夜してこの仮説から出る結論を組み立てた。」

これが、「ケクレの夢」というベンゼン環構造の発想に繋がった有名な逸話です。

ケクレの夢は、科学的なブレークスルーにつながり、ベンゼン環の理解に大きな影響を与えました。彼の提案した構造は、後の研究者たちによって実証され、有機化学の基本的な理論として受け入れられています。

私たちもこんな事ありませんか。「色々試したけれどうまくいかず、考えに行き詰り、ふとホームセンターの商品を眺めていたら、スーと解決の糸口を見つけた。」などという事が。

今の高校教育では、とくに探究力が求められています。どれだけ真剣に向き合ったのか。それがブレークスルーの鍵なのだと私は思います。